



杉本昌隆さん

[棋士]

藤井聡太竜王・名人の師匠である杉本昌隆さんは、当時としては最年少とも言える30代で初めて弟子を取りました。今も現役棋士として活躍するかたわら、弟子や子どもたちの指導、将棋の普及活動など、精力的に活動。指導者としての立場から考えること、留意することなどを伺いました。

全校集会で 奨励会入会を紹介された

私は小学校2年生で将棋を始め、6年生の9月に将棋のプロ養成機関である「奨励会」に入りました。数日後の全校集会で校長先生に名前を呼ばれ、「夏休みに一番頑張った子」として紹介されたことは今でもよく覚えています。

校長先生は、私がプロを目指していて、夏休みに奨励会の試験を受けて合格したことを紹介し、みんなの前で「頑張ってたね」と激励してくださいました。それがとても誇らしく、うれしかったです。

教える側の鉄則は 「教えずきないこと」

プロ棋士にはそれぞれ勝利への正解や得意戦法がありますが、子どもにも、その子なりの答えや戦い方があります。ところが、熱心な指導者であればあるほど、自分の戦法をとことん教え込んでしまします。

私自身も子どもの頃、そういう教えるを受けた経験があります。教わった技術は確かに高いものでしたが、いざやってみても、自分には合いませんでした。「人から教わった形を使っても勝てない。それならば、負けてもいいから自分の得意な戦法でやるべきだ」と思ったのを覚えています。

合わないやり方は結果につながりにく

いだけでなく、興味を失うきっかけにもなりかねません。指導において、その点は十分に注意が必要だと思います。

結果ではなく、過程を評価する

将棋教室には、いろいろなタイプの子どもがいます。指導する側は、苦戦している子や私の強い子をどうしても集中的に見てしまい、順調に向上している子やおとなしい子には簡単な言葉しか掛けず、後回しにしがちです。順調な子からすれば、「なぜ自分も同じように見てくれないんだろう」と思っているかもしれません。子どもにとって大人の一言は重く、よくも悪くも大きな影響を与えるものです。

将棋には、対局を終えた後に指し手を再現しながら内容を振り返る「感想戦」というものがあります。負ける要因となった一手があったとしても「この間、藤井竜王・名人も同じような手を指していたよ」「負けたけど、この一手はよかったね」という一言が、子どもに自信を持たせます。結果だけでなく、その過程においてよかった点を認めてあげることが大事だと思います。それをせずに「これはダメだ」と切り捨ててしまうと、子どもの自由な発想が失われてしまいます。

将棋では、教科書的な手ばかり選ぶより、悪手が多くてもどんどん挑戦していく子の方が将来性が高いとされています。藤井竜王・名人も自由な発想を持ち、

子どもには珍しく長考する子でした。以前は、子どもの頃に考えすぎるのはよくない、失敗してもいいから短時間で選んでいくのがよいと考えられていました。それでも彼は自分の納得のいくやり方を貫き通しました。そのことが後の成長につながったのだと思います。

こうあるべきと決めつけない

何か目標を設定し、挑戦することは大事です。一気に達成するのは無理でも、小さな成功を積み重ねて自信をつけていけばいいと思います。

ただし、目標を達成できなかったときに「できなかった」と思わせてはいけません。例えば、「勝負には負けたけれど、内容は勝ちに等しかったよ」という言葉を掛ければ、その子は「今日の自分はよかった」と思えます。勝負の結果は変えられませんが、その過程に目を向けることで掛ける言葉が見つかると思います。

そうはいつでも、指導は難しいものです。「こうあるべき」「こうすべきだった」と考えると、辛いことばかりが増えてしまいます。将棋には「それも一局、これも一局」と言う言葉があります。人生も同じで「こうでなければいけない」という正解はなく「それも一局」ではないでしょうか。答えに至るまでの道のりは、人によって違うものです。「それも一局」と考えることで、気持ちが軽くなります。

将棋も人生も「それも一局」と 考えれば、気持ちが軽くなります

PROFILE

すぎもとまさたか●1968年、愛知県名古屋市生まれ。竜王戦1組通算7期。2022年1月28日、通算600勝達成。藤井聡太竜王・名人の師匠で、週刊文春「師匠はつらいよ」連載中。朝日新聞「杉本昌隆八段の棋道愛楽」不定期連載中。名古屋市を中心に、主として東海地方で熱心に普及を務める。